

志
院
川



高
山
如
畫
若
詩



香 流 川

三ヶ峯の山陵に源を発する香流川は、北熊、大草地域一帯の豊富な湧水と共に、多くの池沼により、松ヶ杵川、神明川、溝ノ杵川、等小川、用水溝の落水等合流して、水量を増して香流川に入る。前熊又一ノ井、中井附近に上水して寺田用水と合流して灌漑する。往古の香流川は上流を鴨田川とも云う。(旧愛知郡誌)

古るき年代には、大草の地に権道寺という寺院があり、治承年間の頃にか兵火により焼失したと云う。仏体、仏具等多く川に流れて、法雲たなびき、薫香風に流れて漂ったと云う。人誰か、香流川と云う。

香流川は太古の時代より多くの小川に水量を増して自然の低地を叢林の中に流れを作り、豪雨大水ごとに其の流れを変え、人は川畔の流れに生き、生活した。古く石場、一ノ井の地に人は住み、又志水、平地に、中井の地にも、古代の人は川辺に生活したと云う。村も郷も、界もない古代人は、僅かでも川畔に葦原を拓いて炊煙を上げていたのが郷邑発祥の祖人である。字広面、東田の大きな曲折部も何時か自然の流れの中に出来て、大雨ごと上流地に水害は生じた。此処に水と農民とのたたかいを生じ、旱天に雨を祈りて水神を北熊の山嶺に祀り、風水害に祈り志水の地に多度社を祀った。香流の水は流れて、猪ノ鼻の地に、中根原、高根、堀越に発して堀越川となつて合流する。

上古の天嶮は此の地に流水を扼して、丈なす葦の湿原に滞水して多くの池沼を作り、人跡を拒否して幾百星霜濁水は漂い、流れ、滝となり、堰に落水して流れた。往古猪ノ鼻の流れは、安昌寺前を西にも分流したと云う。当時附近一帯は深い葦の沼地であったと云う。岩作の農耕は早くより拓けて、寛文年以前には田地四五町一反六畝六歩という。又寛文覚書によれば当時既に田地六十一町四反六畝歩と農耕されていたと云う。灌漑用水は香流川棚下二、三百米の地にて取水上水して溝渠に引いたと云う。稲作用水は川掛用水、池掛り用水に二区分して、徳川時代延宝七年六月には(一六七九年)時の庄屋組頭により、水番、水掛制度を設置して、我田引水をなくして用水は公平に分配した。

以来三百余年此の制度は、時代の変遷の中を百姓騒動も、水喧嘩もなく、長い戦争中の課程に於ても、又敗戦時食糧難の時代にも、よくこれを守り遵守して農耕に効だ。従も、昭和四十八年十二月、岩作土地改良事業により多くの古墳、古塚、古道、畦畔、古池沼、池洲、溝渠等と共に、八十余町歩に亘る田地上に有史以来の姿も従

も消滅していった。

猪ノ鼻棚下に落水した香流川の流水は、そのまま南に流れを作り東島の藪かげに入り、大きく東に廻水して又南に流れる。往古より其の附近は、東島の藪だたみ、又藪障子とも云う。自然の流水害を自然の竹藪でよく守った。人の自然の考えである。

流れは其の後いくつも湾曲して、南に、又西へと向きを変えて流れ、途中向田用水を上水し、水車をまわし、中脇中島の地で灌漑用水が落水して合し、寺山の地点で勝入、丸根、先達附近に源を発する香流川と合流して西に蛇行して流れる。

又、岩作字落合の地で、寅山、丸根、雁又等に源を発する雁又川と合流し、岩作字長箴に灌漑用自然の整正池として存在した。池洲(千余坪)からの落水も、此処で合流する。字落合の地名は、此処から発生したものである。往古より岩作村の境界地で、祭り神事の諸行事に多く地名が出る。

其の附近は古くより川が湾曲して流れていたが、時代と共に数度の改修により、多くの河川敷地を残して流れた。

香流川は、岩作の南方を長湫と界して西に蛇行して流れ、草掛、上川原の地を経て猪子石に入る。延々たる流水は三里二十二町二十一間と古書に云う。流れ、流れて矢田川に合流する。

恵みの水であり生活の川であり、農業用水であった、香流川の川畔に古代人の発祥をみる。北熊の人は、石場堂脇の川畔に、前熊の先人は一ノ井、志水の川辺に、大草の古人は平地、中井の川畔に生きて、生活して拓いた。又岩作の祖人は南嶋、寺山の川畔に発祥して拓いた。人と水との関係は深く、時に又水による被害も多大であった。豪雨洪水の都度、田畑の流失、家屋、人名を多く失って来た。年貢米上納が困難を嘆願した上申古書が今に多く残る。

(一) 洪水流失(岩作村)岩作里誌による。

明和四年洪水田畑流失 一町二反七畝歩

安永八年八月 大洪水

文化十二年六月 洪水

天保元年七月 洪水

天保七年七月 洪水

嘉永三年七月 家屋七棟倒流失

弘化四年九月 洪水 田三反五畝十六歩流失

慶応元年五月 洪水

慶応四年八月 洪水 水田九反八畝一步流失

明治四年八月 洪水 田二反八畝十六歩流失

□ 川堀り行事(岩作)

大旱魃に際し、稲作用水不足の時、又五月の田植の時期に当り、水不足により田植を延ばしても出来ない様な場合、香流川の河床深く掘って、川堀り行事を行い出水と同時に、池の水も落水して田植を一斉に実施した。旱魃で枯渴した砂礫の河床面を万二米余も深く掘り進むと予想以上に多量な覆流水の出水がある。

往古より岩作村は、猪ノ鼻棚上の河床より前熊村三ノ井口附近まで(現在の溝下橋附近)川堀りする事を慣例とした。又、猪ノ子石村は古くより岩作猪ノ鼻棚下まで、川堀りする事を慣例としていた。(古来よりの村規定)

○ 旱魃

明治十六年六月より九月まで八十四日間に亘る大旱魃

明治二十六年五月より七月までの大旱魃

大正十三年六月より八十二日間に亘る大旱魃

1. 大旱魃に際し、北熊山上水神祈願
2. 岩作高根山々上猪ノ鼻水神祈願
3. 前熊多度社への雨乞祈願
4. 各大字氏神之伊勢多度大社より黒髯様を奉迎祭祈して雨乞神事をした。
5. 大字長湫は和合の田螺を迎えて雨乞する。
6. 今岩作立石池南堤上に八大龍王碑石建立する大正十三年六月大旱魃に際して、大草三光院岩作豊龍院長湫豊善院の三法師此の池の龍神に雨乞祈願を執行して、後に建碑する。

(一) 北熊と香流川

北熊の地は、西北に大草、南西に前熊と相接し、東に三ヶ峯の山陵岩作の山地に界して、尾張三河兩國を分けて山頂は南北に多く連なる。

三郷中最も早く、古くより拓けて三ヶ峯の山稜香流の源泉に人は住だ。発祥の年代は祥かでなくとも、古く弥生の中期頃、既に人の居住は在ったと云う。蔭々たる香流の清川は、嶺々たる三ヶ峯の翠溪谷間に発して自然の蛇行を作って叢中深く流れ、川畔の炊煙僅かに昇って東に流れる。鴨立つ羽音に秋をきく風情は、太古の黎明は神明の森に明けて、人は古くより神門、堂脇及石場の地に住んだと伝う。山野に狩して獲物を求め、泉川の流れを汲んで農耕に励みいそしんだ。集落は何時か時代の變遷に現在の地へと移り住んで郷村をなしていった。

北熊郷が古く発祥して、遠く三ヶ峯の山丘を越して衣ノ郷と交行し、又近く岩作山口ノ洞と親交を重ねていた頃、大草、前熊の地に僅かに人の影はさしても、今だ一郷としての名はなさず、葦原の原野に人々は営々黙々と開拓していった。

古墳時代七、八世紀頃か、山紫水明の地北熊翠緑の南陵に古墳が次々と出現した。被葬者は何人か？ 知り得る予地もない。風飄々とふいて川の流れはつきない。水に生き、川に生活して幾百星霜、法雲薫して誰か香流の川と名づく。又の名を鴨田川とも云う。

北熊郷は古くより神明社附近の地、神門前、堂脇及石場等の土地に多く住んだと古伝に云う。往時は全く三ヶ峯山中であって、多度社及三光院以東は森林多く、深い繁みの中に在ったと云う。山に多くの獲物を追い山草を得て、田畑の開拓を進めながら自然の流水の中で、稲作農耕を繰返していったが、何時か人の居住も多く、田地開拓が進むにつれて多く雨池の築造をなした。今の小江戸池、大洞池、塩見坂池等殆ど徳川中期以降に作った。寛文四年の覚書によれば、当時既に三十余町歩の田畑を耕作して、百八十人ぐらいの人が居住したと云う。

井水は古くより石場、鯉ヶ廻間及深田附近の地に於て、上水管理して農耕用水とした。古くより三ヶ峯山溪自然流水にたよる処多く、水への祈願は切実で古く山之神と共に、山溪深く山嶺西面の地に水神を祀り、雨乞祈願とともに豊作を祈って来た。

地下水の自然墳出は、東平地、早稲田の地附近に多くして、以東には余りなく福井、深田等谷間の田地の処々に、僅かづつ清水として農耕を潤すと云うが流れ流れて、何時か香流川に落水して行く。

(二) 大草と香流川

字熊張大草の地は、北に高く大草山、権道寺山、東山の山陵を連ね南は香流川により字前熊と界している。川水に粘板岩を基盤とする地層を、香流川の河床深く之を見る。北に高く南に低い基層上に、太古の流土は幾重にも擁積を重ねて荒涼たる草原をなしたと云う。豊富な水源は、基盤境界中の水脈より湧水するものにして、遠く猿投、三国の水脈に之を発すると云う。

世に古く水福山大草の地と云う。上古大草の発祥は、古くより字中井、平地附近の川畔に人は居住したが、度々の水害により何時か今の高地に転居した。今より一千有余年の往古には権道寺を創建し、応永、永享年間に三光院の開基をみている。

古く中井、平地に発祥した農民は、三光院附近を中心に以東を開拓して農耕したと云う。寛文、元祿年間頃に至り、人の居住多くして新田の開発多く、現在の田畑の殆どは其の当時多く開拓したものと伝う。大草の地は北に溝之杵、松之杵、及清水田谷等の山峽多く、幸に湧水多くして池泉を作り、権道寺溝之杵川、松ノ杵川、清水田川の小川溝は多くの美田を潤して香流川へと落水していった。

又東部平地附近の田地は、三ヶ峯山地汐見坂附近に源を発する、神明境川の水を取り入れて灌漑耕作し香流川に落水した。

香流川本流の水の利用は一般に川が低く、志水、平地地域に於いて、古くは堰を設けて河床深かく木管（八寸方位松木造り、上部に多数の穴をうがつ）を設置して、耕作田地に通水していた。

字中井は井水の中井でもある。古く上井、中井は香流川より取水上水して字中井真行田附近一帯の耕作田地に灌漑した。

大草田地は古くより中部地区に早く、東に開拓して西につれて遅く開拓したと云う。特に字真行田の開発は遅く、往古は岩作の猪ノ鼻が天嶮による滝状をなして、香流川の自然の流水を扼していたので一衣滞水をなして、真行田附近一帯の地域は池沼多く、沢湿地の荒地ばかりで、猪ノ鼻の開発整備と共に美田化して耕作した。幸い大草の地には、古来天然自然の湧水出水多く、古く宝永、安政の大地震に山地に多く亀裂を生じ、多量の湧水が噴出したと、特に三光院以東の地に多くあったと里伝に言う。

又、清水池、上杵池、中杵池、溝ノ杵池等々多く築堤し、古く中井、上井、平井等により河水を上水して灌漑

用水としたが、香流川に落水していった。

四 前熊と香流川

字前熊の地は、北に低く香流川により字熊張大草と界している。南は東に高く、前山、原山と往古は山林として一ノ井、三ヶ峯の山稜へと連なっていたが、徳川中期以降元祿、正徳年間当時多く之を開拓して堀越川によって岩作郷中根原及高根と界している。

東に高く一ノ井より三ヶ峯の山嶺は、岩作山と相接して重畳と連なる。三ヶ峯の嶺々峽間、溪谷に源を発して字石場、広田の地に落水して香流川となる。前熊一ノ井の峽谷、一ノ池、二ノ池、三ノ池に源を発して流水は寺田の地田を潤して井水に注いで合流する。

往古前熊の発祥は古く、人は香流川の畔り、志水、一ノ井の地辺に住んだと云う。北熊郷の古代は神門前及堂脇附近の地に早くより多く居住したと云い、前熊一ノ井の地域も又同一ツの土地である関係上同じ時代に居住し発祥したものである。

又、字志水にも古くより人の居住が大草郷平地、中井地区と共に、香流川自然の流れの中に、数戸の集落があったと云う。其の地に古く多度社を祀る。字志水、一ノ井に発祥して、一ノ井の上ノ地より生成発展して西へと多く居住して行ったと云う。徳川時代明暦、寛文年間頃には二十五余戸二百数十人の居住があったと記す。其の後天和、貞享と年々人の居住多く、田畑も又多く開拓して行った。

字一ノ井の地に初めて一ノ井の上水をなして農耕用水とし、一ノ池に発する寺田の落水に合流して行った。字寺田の上流附近、香流川上流地より取入上水したのを、中井又は二ノ井と云う。一ノ井用水に合流して字中井附近の田地をよく灌漑した。

字橋本ノ井を三ノ井と云う。此の地には早くより人の居住があり、天文年間郷主福岡氏より、和合寺を創建した、今の前熊寺の古代である。

字志水ノ井、往古より香流川神明界川の合流地で、多く清水を湧出したと云う。古くより多度社の裏手や、下流の地に堰を設けて取入上水して広面、溝下等広く稲作用水に供した。此処志水の地に古く多度社を祀る。室町時代のことと伝う。往古之時代より、多く此の地に水害が発生したのは、字東田、広面附近の香流川流水の曲折

と、猪ノ鼻上郷の滞水に原因して、上郷三郷の被害は年々多大であった。農民こぞって伊勢より多度之神を此処の地に奉遷して祀つり、併せて歟之神を祀る。又、前熊寺々域に津嶋社を祀って豊作を祈願したと云う。

三ヶ峯の溪間に源を発して流れる香流川は、途中多くの小川溝水落水等と合し、取水上水をなし又大きく曲水しつゝ、猪ノ鼻の地に堀越川と合流して棚下へと落下流水して行く。

四 岩作と香流川

岩作香流川、御嶽山橋を東に渡ると字壁ノ本、往古岩作十一面観音が祭祀された霊地であるが、現在は安昌寺観音堂に安置する。東島曲折部は大きく竹藪の叢中を清流は下る。東辺の岸壁は丈余をなし、浅間山の松杉は高く、翠緑を水に映じて流れる。往古川の東畔に、川に副って長く七畝歩余りの田地があったと云うが、何時の時代にか流失して水だけが無情に流れる。

頭上高く、浅間の溪谷にしたゞり流れる一筋は、尼母様の小滝となって香流川に落ちる。古くより此の地に良心庵という尼寺があった。浅間森下廻間と地名に言う。本尊仏は庚申にして、寛文五年五月廃寺と古書にある。今は余り知る人もなく僅かに附近の古老が尼母様と口中につぶやいて、小滝にかかると、枝葉に鳴く山鳥を何時までも眺めていた。此処より百米も下れば、東島橋である。大正の初年頃までは板橋が二枚程石の上に架かっていただけの橋であるが、往古より高根越の古道である。橋を東に渡るとすぐ左手の山道は急坂で、古く安政年間御嶽山開山当時の登参道である。東島橋を百米と歩かぬ間に堰となる。上水は川に副って東岸を二三百米余り、美杉が林立する叢中に流れ、向田の農耕地にそそぐ。香流川の西岸は深い雑木の緑に停々と高く老松がかけ、美砂地が美しく広い。千年河原と云う。昭和の初年頃まで、よくこの美しい河原の砂地で、佐義長祭りの煙りが白く流れて行ったと、今もよくおぼえている。何時か香流の本流は大きく、右に湾曲して藪畳の中に入る。東島の藪障子と附近の人は云う。広く深い藪が川畔一帯に連なり、古い小道が竹藪の陰に、川の辺りにうねうねと続く。豪雨の度毎に何時も此処まで走って、濁流が附近の土砂をくずして流れる様を子供心によく見た事がある。

昭和三十五年頃川は教度の改修により、真直に南に流れ、かつての藪畳のわん曲部は河川敷となり、子供遊園地と老人の家が建ち、濁流の面影は附近の竹藪と共になく、明るく美しい空の下で、子供の遊び声だけが大きく聞える。

川の東岸に見えかくれする向田用水も昔日の面影はなく、何時か竹藪の陰に消える。流れが藪下を下ること五、六百米で、向田橋を見る。往古は簡単な板橋で、其の後明治三十一年に字南嶋、向田間の河上に初めて架設され、長七間、幅一間の木橋である。其の後数度の改設で現在の橋となる。向田橋上流百五十米位西岸に昭和十二、三年頃まで水車小屋が在った。向田用水最後の水を利用して水車が廻り、香流川に落水していた。東島橋下流百米位東岸の堰に取水上水した用水溝を附近の人は井路と呼んだ。香流川の東岸に沿って延々八百米余位附近の田地に灌漑して流れ、随処に切り落しの施設をして、丘陵地は墜道水路となり流れは洞穴に入る。又出て水溝路として流れ、最後は大藪地内の墜道に入り、其のまま香流川河床に施設した木管を通水して川の西岸に浮上して、一般水路に流れて水車に落ちる。往古用水溝の架設は詳かでないが、明和、安永年間頃附近の田地開拓と共に渠設されたようで、水車小屋は慶応年間、酒越店の酒造用に其の後倉地氏の所有になり、多量の米麦類を搗いた。

川は白くせせらぎを作って南に流れる。東岸の藪陰に数戸の農家がある。向畑と云う。西岸には家並が続く、字南嶋と云う。上古岩作郷発祥の集落で、古くより人は川畔に生きた。下ること四、五百米で、流れは大きく西に変わり、東岸に青粘土層二丈余の岸壁を残して、壁上高くトチノ木の大樹が数株、附近の雑木と交り茂って森叢を造る。(現在の中学校敷地の西辺附近) 岩作橋まで七、八十米位。古くは平子橋と云う。字南嶋、平子間に架かる。長さ十間、幅一間の木橋で明治三十一年九月、当時の岩作村を代表する木橋で、岩作橋と改銘した。

大溝、元門の地に発した農業用水は、早稻田、田中、城之内、溝添の田地に灌漑して小学校東より南嶋を経て岩作橋西辺より香流川に落水する。

川は愈々西に流れる。南岸先達の竹藪が何時までも続き、北岸は岩作字中脇である。岩作橋から下ると、六、七百米で富士浦橋に到着する。岩作橋と共に長久手を代表する橋の一つである。往古の橋は現在の橋より下流に架るも道路改修後現在に架設した。南岸遠く東より、御旗山、杉ヶ根、松ヶ根、高根山連峯を見る。北岸は岩作字中島、寺山と続く。往古は間北口とも云った。古く妙善寺と云う古寺あり、長久手合戦当時には存立していた。本尊仏に千手観音を祀つるも、寛文二年三月廃寺となり、寺山の地名だけを今に残す。集落は南嶋と共に岩作郷発祥の古地で、人は香流川畔に住んだ。西流することしばし南に香桶川が合流する。先達川とも云う。源は遠く丸根、仏ヶ根、コウロギの山地にあって、此の地にそそぐ。北に弥一小屋の水車が輪り、流れはいつか石田の湾曲部に、川は大きくS字状に流れていたが、今は改修して真直に流れを作り、石田の落水をまじ得て益々水量を増して流れる。此の附近一帯(石田、長箴、坊ノ後、野田農等)は天正十二年四月九日長久手合戦松ヶ根合戦の主戦場地である。南松ヶ根山頂一帯に布陣する堀久太郎秀政に対し川を渡河した徳川軍大須賀、丹羽軍激戦の地であるが別に詳記する。

岩作字西島、石田附近で大きく湾曲していた香流川は、字石田で字五反田、藪田附近の稻掛用水を合せ合流する。

又、池洲に発する灌漑用水は落水して、字長箴平和橋の下流で香流川に合流するが、往古川は其の附近より北に大きく湾曲して流れを作り、南岸は長湫字原邸と云う。古くより松林多く、雑木の茂みに畑けが点在して、人家は殆んどなく、北岸字落合の堤上に古くより墓碑が六基在って、今は堤上竹林中に南面して建つ。建立の詳細は不明であるが、法名を判読すれば左記の通り古碑なり。

自得院賞須賀賢居士

享保三戊戌歳(一、七一八年)

崇嚴道教居士

享保十一丙午歳四月二日(一、七二六年)

本岳妙養信女

享保十七年 以下不明(一、七三二年)

外に享保年二基及宝暦年一基が建つ。

湾曲して流れた香流川は、戦後数度の河川改修により真直となり、今北岸より大きく旧河川敷を残す。岩作字雁又、寅山、及丸根附近に源を発する雁又川は、立石池に水を注ぎつつ流れて、字落合にて香流川に合流して長湫地域に入る。

往古此の附近の香流川は竹林、熊笹の密生する葦原小松原の荒野で、数条の流れは自然の叢中を白くはうように流れていた。今長湫字上川原、中川原及下川原の地名を香流川流域の地に残し、又東原山、西原山、南原山、及下山等の地名を多く残して、流れは何時か猪子石原へと入り、矢田川に合流する。

(四) 猪ノ鼻の棚について

猪ノ鼻は古来より有名な難所であった。猪ノ鼻の呼称は東の高山の山容が北に突出して、猪の鼻状の様な地形を代名詞したもので、湯の花は水を代名して石定井とも云う。古くより水掛りを湯掛りと岩作地方で云う。

水も、湯も、井も同意儀である。総て農業用水掛り、井水のことを言う。又、伊之華、伊之根とも云う。伊は磐根に発祥して、石、岩に通じる。今棚下河川敷西寄りに在る大磐岩に基因して、古人は岩作の根石といった。往古は滝の中段に在って、下は暗く洞穴をなしていたと伝う。上古之時代より岩作村発祥の川上の聖地として、遠く石作、岩作の称名は伊之華、伊之根の磐根に連なり総ての祭り神事による、禊、潔斎等を古くより此の地で行った。

稲作農業に生きた農民の用水取入口と共に、岩作の神地として明治の初年に至るまで余り人跡を許さず、仙境の地であった。

往古の農業用井水取入口である堰は、棚下二、三百米下流に当る。現在の御嶽山橋の上部辺りに在った。当時は道路も川堤もなく、現在の名鉄バス旧跡地附近一帯は香流川が西にも分流して、沼池が多く処々に田地が転在して、川も沼も又田地も一衣帯水の中にあつて、古くよりは此の地で堰を設け井上水した。

明和四年（一、七六七年）の洪水で堰がきれ、田畑の流失三反二畝十歩の記録が残る。

香流川は広大な三ヶ峯の山陵に水源を発して、古く上郷村、岩作村のやや中央部を東西に流れ、色金山、高根山の山峡は猪ノ鼻の地に於て相接し交つて、古生層の珪岩、角岩及粘板岩の基盤が露頭し河床に出て滝となり、太古以来数千年の流水を扼していたので、年々土砂は流下して深い堆積層を上郷の地に作つて行った。上古以来猪ノ鼻の自然は西より色金山の岩磐が重層して、香流川の河中深く入り、東高根山の山陵に連なり、鞍部が滝になり落水していたと古くより里伝に又古画に表す。

古くより香流川の河床は深く、特に棚下は深く鎌倉時代頃までは滝状であつたらしく、其の後次第に棚となり、

堰井水となつて今日に及ぶ。

寛文、天和、元祿年間頃中根原、高根に初めて居住して多くの田地を開拓し琵琶ヶ池、大根ノ池等築造したるも、猪ノ鼻は今だ人跡を拒否して、人の多くは市坂より立花道に交行した。

寛政八年（一、七九六年）市坂改修時に際し道標石碑が建立する。

天保九年、中根原、長鶴大池を築造して岩作稲作用水の増水を図るも、実際に猪ノ鼻、石定井の建設にかかつたのは明治十六年のことである。

天保十二、十三年頃小田切春江画く、尾張名所図絵中岩作安昌寺附近の風景図は、猪ノ鼻は滝の表現にして道は寺まであつて以東の道は画中にない。

猪ノ鼻の地によりやく人の歩くだけの道が開設されたのは、新池築造にかかる明治初年のことであるが、道は川の東に、高根山下川畔に開道したと云う。現在の御嶽山橋附近を西より川に入って渡り、山麓河畔を北に歩いて往行した。

其の後色金山山麓西側に開道されて明治三十六年郡道となり、大正十三年更に道幅を二間に改修して県道となつて現在に至る。

猪ノ鼻滝上部は香流川自然の流水が、字真行田、下田附近に亘り深く滞水をなして、各処に池沼を作り、深潤沈潭として漂よゝ、葦野いばら、笹小竹等及水草類の雑木雑草が丈余に茂り、兩岸の松、杉、雑木、老木、巨木、天に押し池、沼、流水を覆つて茂り、ひる尙くらく暗澹静寂の中に落水の音を叢中に聴くと云う、情影と伝う。

太古之時代此処猪ノ鼻の池に、大蛇が棲息したと古くより里伝に云う。伊保大井の堰、八草の椀貸池と共に有名である。

古い里伝に

ここはやざこか 安昌寺よこか

むかし蛇の出た 井のはなか

又、徳川時代末には普母（現在豊田市）の俠客兼五郎が、岩作の博徒と猪ノ鼻で果し合をした。双方五間余を離れヤアヤアの威喝の上一気に駆け寄り、一太刀で勝負がついたと云う。

岩作の里謡に

いとしころもの 兼五郎さんは

首をとられた 井のはなで

古くより農作業用の農具一斗箕、八升箕等竹箕、藤箕等箕を伏せて置くことを、忌みきらった。首のない人の臥た姿と、箕の伏せた姿は同一と云う。

以上縷々として猪ノ鼻の景観と古くよりの里伝を綴ったが、自然の天嶮が流水を扼して滞水をなし、長く人跡を拒否した。昭和の初年頃尚棚上は大きく池川を作り、深淵丈余をなし、渦流棚上に散って落下しており、川畔に今だ多くの沼池を作り葦草が繁茂していた。東高根山頂に水神を祀つる。西川畔に馬頭観音を祀って人の交行を祈った。

内 香流川々畔 松ケ根の戦について（長久手合戦）

香流川が香桶川と合流する処よりやや下流附近は、かつて今より約四百年前、天正十二年四月九日（一、五八四年）（陽暦五月十八日）長久手合戦松ケ根之合戦が行われた戦跡の地である。

往時香流川を界して川畔の北岸は古く岩作村であり、字石田、長茂、落合の地と川の流れに続く。川の南岸は古くより長久手村字坊ノ後、野田農で南に山陵が東より御旗山（富士ケ根）、杉ケ根、松ケ根、高根山及細ケ根と小高く連峯をなしている。又三社ノ森は松ケ根南麓の山地にして、古く社を祀つる（景行天皇社）。合戦当時殆ど其の附近に人家はなく、石田附近に僅か数戸の農家が点在して香流川、香桶川自然の流域は茫々たる雑木草と葦原の荒野であった。

当時の岩作村は、字城之内、南嶋及寺山嶋附近に人は多く住み、五十余戸程と伝う。丹羽氏次、加藤忠景が支配地と云う。

時に、天正十二年四月九日早朝、長久手合戦池田勝入方の隊列（岡崎追討軍行進中）陣立は、先鋒池田勝入、長子紀伊守、二男輝政、父子以下の将兵約六千有余人は岩崎城（日進町）附近に在って、二陣の将森長可以下三千余人の将兵は、岩崎竹ノ山西麓附近に駐留していた。

三陣堀久太郎秀政軍監として参加、手勢約三千人と云う。同時刻頃森勢に続いて長湫三社の森附近に駐留していた、後陣（四陣）三好孫七郎秀次（十七才初陣）追討軍総大将として、本地原白山林（尾張旭市）高地附近一帯に約五千余人の将兵朝の契飯中であつたと云う。先手軍は日進町岩崎に、後備軍は尾張旭市白山林にと、延々八キロ余に亘り縦隊をなして、岡崎表に向い進行中であつたのが四月九日早朝現在に於ける秀吉方池田勝入軍外三軍の隊形であつた。

小牧山を出発して、池田勝入軍を急追中であつた徳川家康は、小幡勝川附近で刻々と入る情報により、池田軍の所在を確認し隊情陣立を詳さに得て、九日午前一時頃小幡城に入って、先に入城していた水野忠重、大須賀康高、丹羽氏次等と軍議し、決戦に備えた。徳川軍は二手に分れ、別動隊は水野忠重、大須賀康高先導を丹羽氏次以下五千余人と云う。九日早く小幡城を発して目ざす白山林に駐留する三好秀次軍に三方より襲いかかつたと云う。朝食中の三好軍は不意をつかれて激戦空しく遂に破れ、南方に多く敗走した。時に午前五時頃という。

徳川家康、織田信雄本隊は将兵約九千五百余人、九日早く小幡城を発して山口川を渡り本地坂上を経て、岩作村字立花の地に入り、色金山に上り軍兵を八幡林の森附近一帯に留めた。南にひろがる山谷と池田軍を展望しつつ、白山林の戦い徳川軍勝どきの声をきいていたと、殆ど同時刻頃と云う。

同じ時刻頃か、池田勝入岩崎城を攻て遂に落城、長久手城主加藤太郎衛門忠景共に戦死した。四十二才。勝入、徳川家康の追撃を知り、急ぎ長久手の地に馬を返して布陣する。

白山林の戦い南に敗走する三好軍の急迫を三社ノ森附近で知った。軍監堀久太郎秀政、軍を督して背後の松ケ根に上り、杉ケ根高根山の山上一帯の地に手練の鉄砲隊を多く布陣して徳川追撃軍を迎え撃った。香流川南岸前面に徳川軍大須賀、水野、丹羽軍の敵兵をよく引きつけた堀軍鉄砲隊数百丁の一斉射撃は勝に乗じた徳川軍別動隊を一挙に粉碎していった。徳川軍五百余の首級を残して西に、東に敗走したと云う。世に言う長久手合戦松ケ根の合戦と云う。

天正三年、長篠ノ戦に織田信長、鉄砲隊を使用して武田勢を撃滅後九年後のことである。堀久太郎秀政長久手合戦後、天正十八年小田原の役に陣中に没した。

堀秀政は近江源氏佐々木の一族で、早くより織田信長の近習となり近江国国友鉄砲鍛冶を支配した。長久手合戦当時は近江国犬上郡佐和山城主であった。合戦後天正十三年には越前加賀で十九万石、慶長三年秀治の代に越後春日山で三十万石を領した。其の後変遷多くして慶応三年幕末には、十二代親広信濃飯田で一万五千石を最後とした。

徳川軍本多康重松ヶ根の戦に際し、配下の兵を多く卒いて字野田農の地に、堀秀政の本陣を猛撃して必死の苦戦をなしたと云う。身に七ヶ所の重傷をうけ、名のある部下三十六人の戦死により、僅かに一命を辛うじて得たという。世に康重松ヶ根の奪戦と伝える。

松ヶ根の戦は、字野田農、坊ノ後、岩作村字石田、長歳、落合一帯の荒野、香流川河畔一帯で死闘を繰返したが、所在の農民は早くも知って、其の殆どは多く三ヶ峯山中に七日より十日間ぐらい避難したと聞く。中に一人が五、六日で家に戻って見ると、部屋の奥より武者が一人出て来たので、驚きにげ返って来たると里伝は古くより残る。

合戦後野田農、石田、長歳の荒野に数多くの死体、遺物、遺品等を残した。所在の農民は其の場所に其処此処の地に埋て多くの塚を作った。後年、田地開発と共に多く田中の草塚として永く残り、古代よりの古墳と共に、世に言う岩作の百八塚として有名であったが、昭和四十八年十二月、岩作土地改良事業により四百年来の勇魂は昇天して、戦跡は消滅した。

古史料一 (長久手ノ戦 秀吉ノ手紙)

亀子文書

尾口楽田要書丈夫ニ普請申付候去八日御札今十一日令拜見候 仍此面儀弥無異儀候 併一昨日九日池田勝入森武蔵三州境目相動岩崎城責崩首数多討捕得大利候処岡崎面へ深々と相動及一戦失勝利候 定其辺へ雑説共可申候為元無差儀候 殊ニ勢州松賀嶋令落去彼面之人数我等弟始美濃守筒井順慶悉此表へ著陣候 於様子者不可有御氣遣候 尙期末音節候 恐々謹言

卯月十一日 (義昌)

秀吉 花押

木曾伊与守殿

参御返報

古史料二 (長久手ノ戦 家康ノ手紙)

徳川義親氏所蔵文書

今日九日午之刻 於岩崎之口及合戦

池田紀伊守森庄蔵堀久太郎長谷川竹外大将分悉人数一万余討捕候 郎可遂上絡候間本望可被察候 恐々謹言

卯月九日申刻

家康 花押

平岩七之助殿

鳥居彦衛門尉殿

古史料三 (長久手ノ戦 秀吉ノ手紙)

武州文書

書状令披見候 仍去九日参州岡崎表池田相領候処敵夜中人数をくり候て彼後切懸及一戦手前切崩数多討果候 然処池勝令負手不慮之段不是非候 此表儀様堅固申付候 勢州杯々の札も令落居彼表人数式万余昨日令著陣候 於様子不可有氣遣候其後苦勞令推察候、尙追々可被申越候 恐々謹言

卯月十一日
長船五左衛門殿

筑前守

秀吉 朱印

長久手合戦記

長久手軍記

長久手の戦

長久手村誌

寛政重修諸家譜

愛知県史

旧愛知郡誌

大草村誌

長湫、岩作、大草、北熊、前熊

各区長所有古文書等による

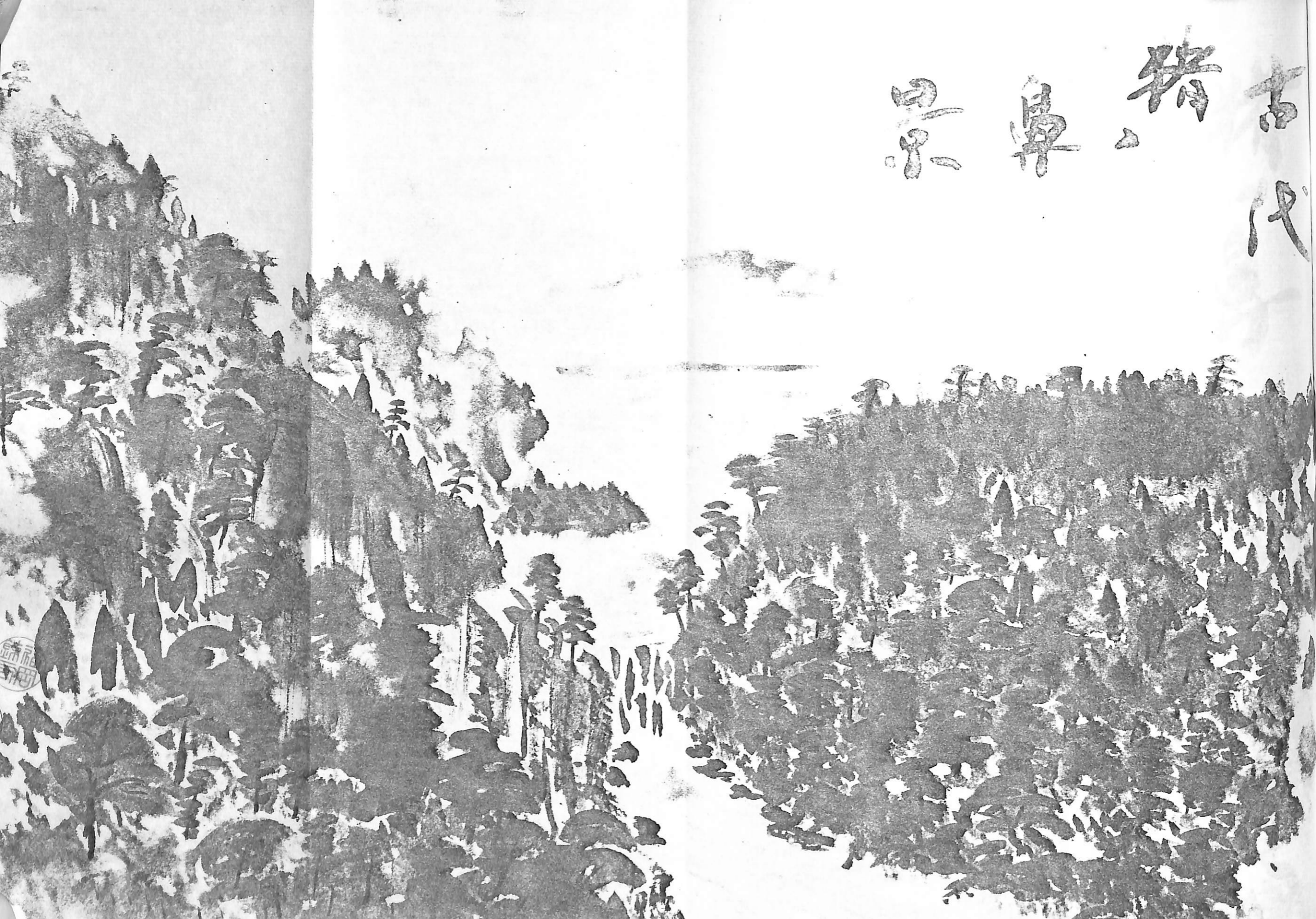
岩作里誌、里伝、口伝、説話

等による。

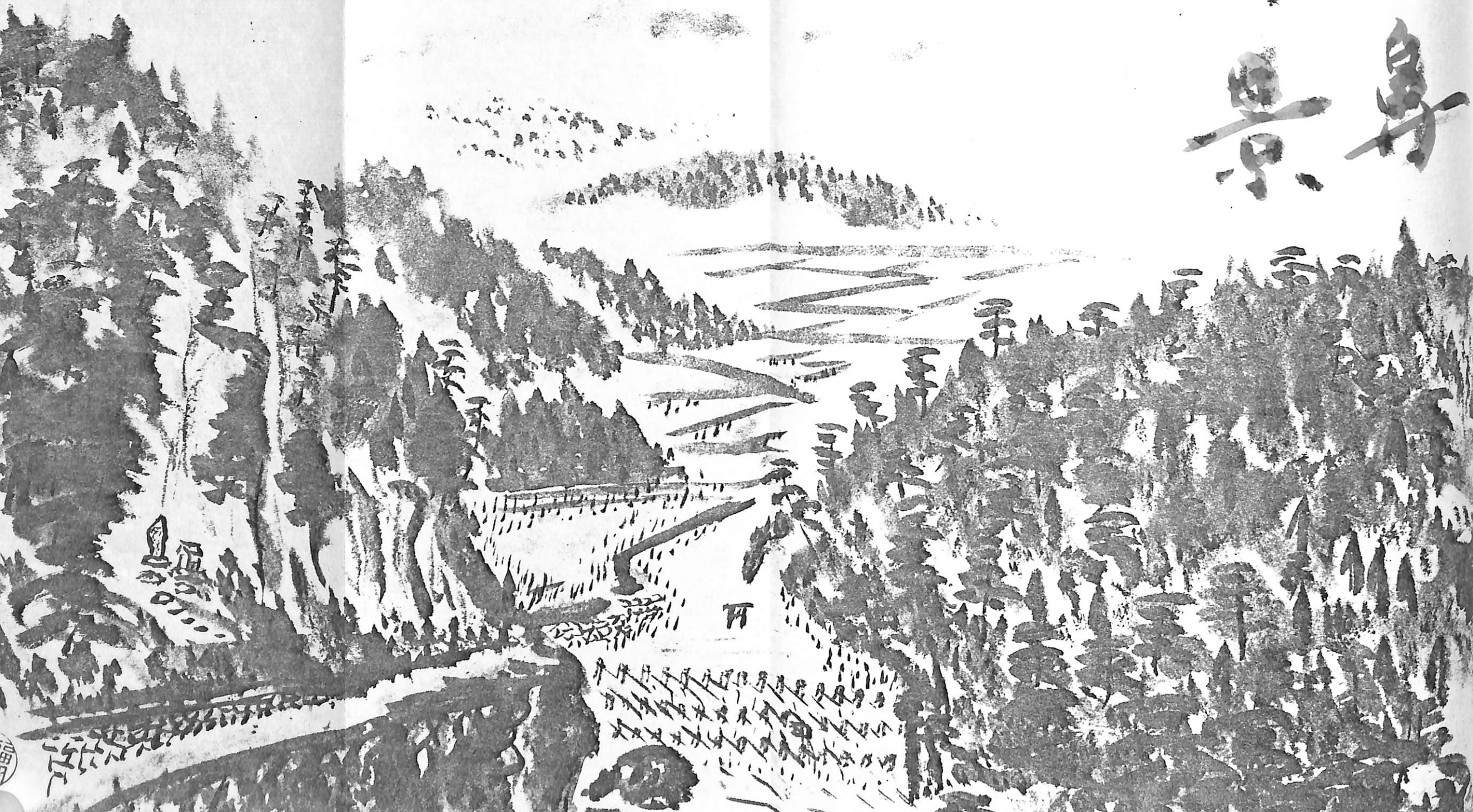
猪古代

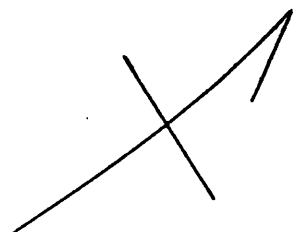


古
代
猪
鼻
泉



猪鼻
凡景

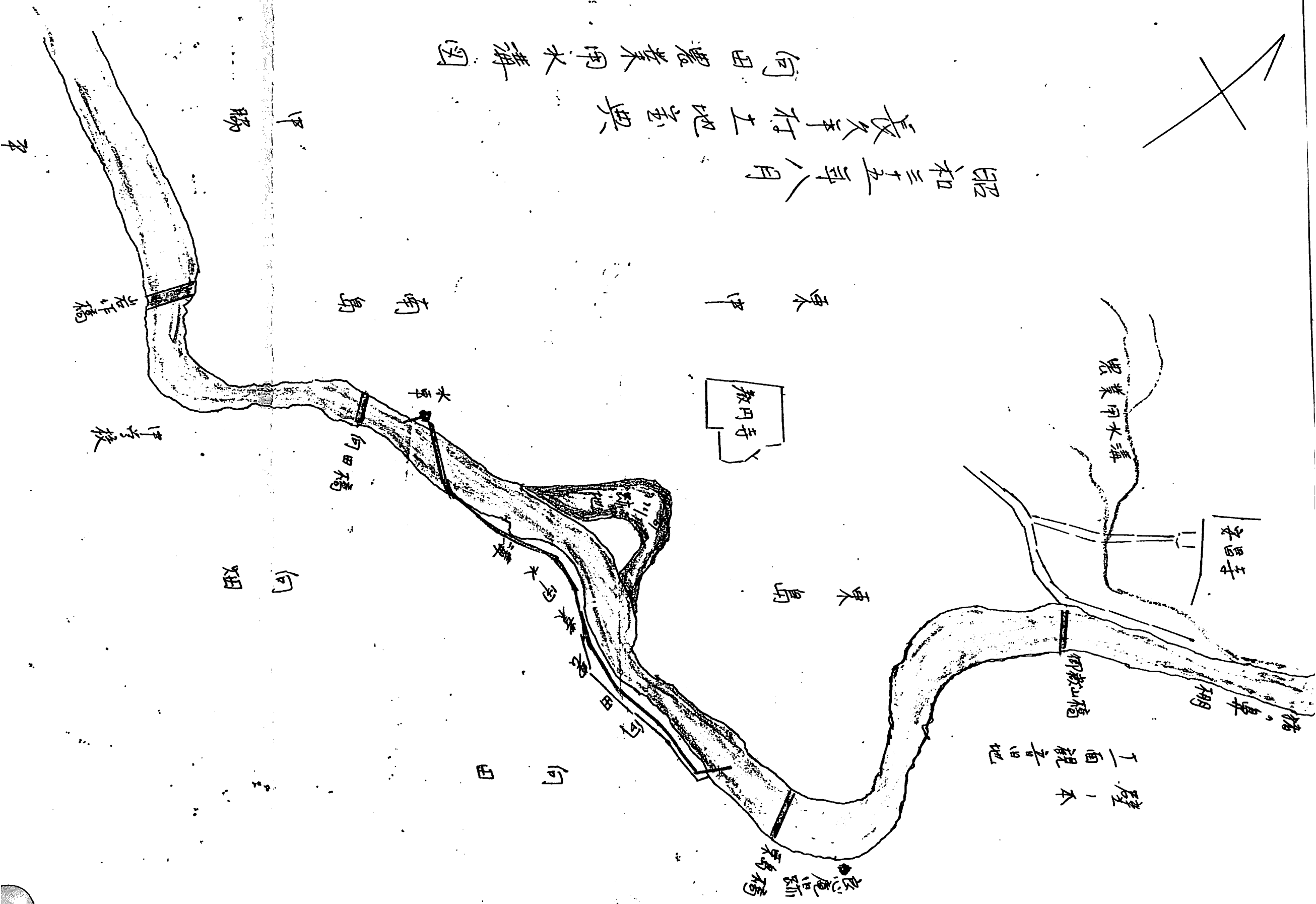




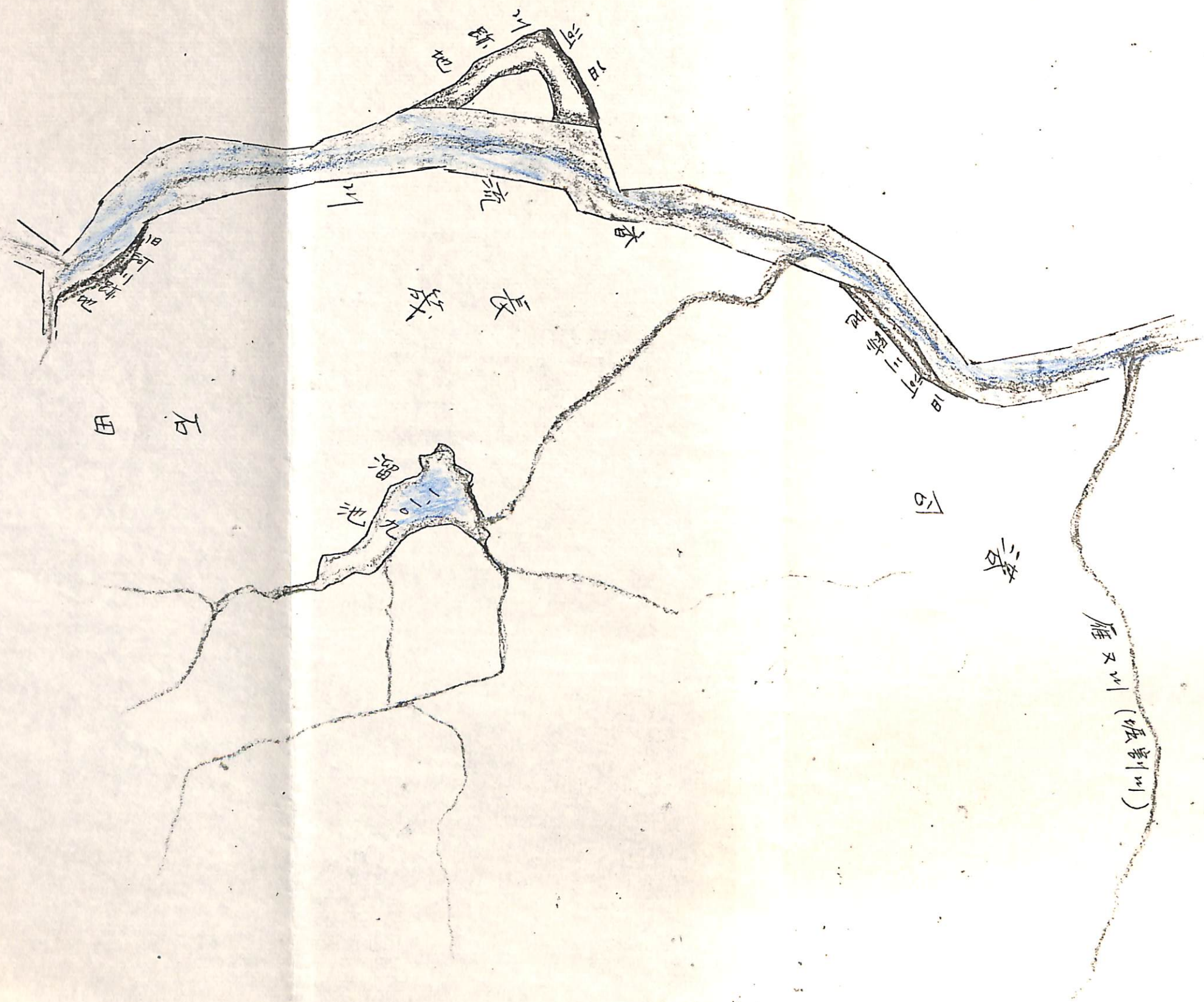
昭和十五年八月

長久手村土地室典

向田農業用水溝圖

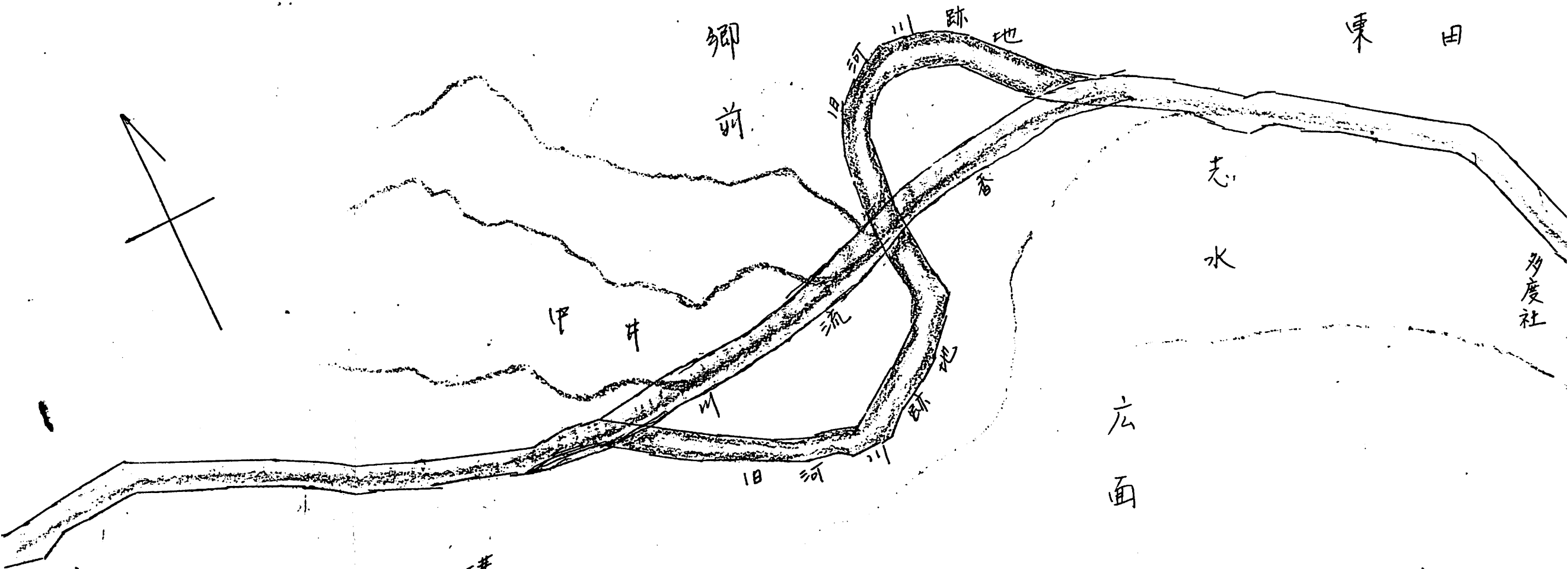
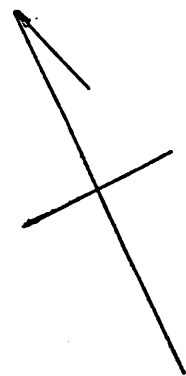


大 学 长 湫



張熊字天

地跡川河 田 栗



為度社

広面

溝下

熊前字天



(七)

別紙添付表

- (一) 岩作東島外二表地図三部
- (二) 岩作猪ノ鼻墨画 二枚
- (三) 岩作字落合附近写真六枚

あ と が き

長久手町史編さん室が、町史資料の一部に香流川の今昔が、書いてほしいと言うことで私の、知り得る処を、少しかいた。

誰もが、川と自分との深い心のつながりはあるが、それは極く自然で、普通なことでも日常時の出来ごとばかりが、表現の出来ない程に沢山にあって人と川との関係は深く、生活の中にあつた。

私が幼く、五、六才の時に、初めて川に架かる、板橋を恐る、恐る渡った時の思い出。佐儀長の、どんど焼の冬の寒い朝、千年河原の白砂に遊んで、黒こげの焼きもちを食べた頃が、川を知った初めの頃と思う、今にして思えば、六十年近くも昔のことになる。

当時の東島橋は一尺余りの、厚板が三枚ぐらい並び、板と板との間に、スキ間が出来て、一丈ぐらい(三米)下の水の流れがよく見えた、それが恐ったものである。

私の母親は、その近くで生れ、毎日のようにその橋を渡ったが、娘時代に橋の東 向畑からよく麦やソバを肩に 背負って、よくこの橋を渡り、当時は一枚ぎりの板橋で荷を負って人が渡ると、一步毎に、板が大きく波うって揺れ動き、恐ろしくて渡れない時、何時も父に強くしかられたと、母はよく話してくれた、其の母親も先年八十七才の老令で亡くなり、今はいない。

少年の頃、夏の暑い日ざしの一日中、よく友達二、三人と一諸に川で遊んだ。

あしの葉かげに、白いせゝらぎをつくり、流れる水は清く川底の小石が、真珠のように光り、小魚が白く石辺を走った。東岸は高く、碧い岩はだに、したゝり落ちる清水の流れ、そゝり立つ杉の林は、天に高く、雑木の茂みと、ともに鬱そうと覆い茂り、夏の日照りを南にうけて、セミが、ひとしきり鳴く川

の深かまに大きく蔭影を作り淀んで、流れる深みにビンやサデを入れては、水を浴び、フナやモロコや、白魚をとり、白砂に小池を作って川水を引き、終日小魚をかまって遊び、家に帰る頃は全部白くなつて死んでいたもので、母によく叱れたものである。

又夏の日には、猪の鼻の棚でもよく遊んだ。二、三年生当時は棚下で落下する流れに水を浴びて、小岩や石を上げては下に潜むメソ（うなぎの小さいもの）、ナマズを手でとった、棚上は深く碧くすんで深よい、時にまた渦を巻いて流れていたもので、気味が悪くて近よりがたく淀みの中程に、鳥居形の井水口が碧水に黒い影を映じて立って居り、時たま誰かが水に入り、泳いだりが棚下は子供の別天地で、終日水と、川魚と一諸に遊んだ幼い時の想い出は誰の心にも、奥く深く残る。

川の自然の美しく清い流れは、戦後時代とともに数度の河川改修により曲折した流れは、真直となり、川水に映じた新緑の影も何時か、白く堅いコンクリートの壁が多く、清く美しいせゝらぎの流れもなく瀬もなく碧い深潭もない、単調な川の流れに小魚も少なく川に遊び、水にたわむれる少年を見ることもない。

川は人間社会の汚水、悪水の流しばと化して死んで行く。

そのような川であってはならない。生きた 自然な 美しく 清い 名のような香流川を、何時までも残して人びとの誰の心にも残る川であることを祈念してあとがきとする

昭和五十六年八月

福岡 録三

